

羽
毛
集
下



賀

うさ
笠がとう似
かわ
賀笠

縁日用下菊

金三冊續き



近曾女が繪草紙ひよ名を書接て宿せ候べ

もる事所り現在人の名を既承とあらず

也れともと柔きど喫すよしと
少時あつまぬ牌等とあらずふせよす

何ぞと問は。それやき妻の達じうが四人ばかりと答

こゝもく思ふ「累と光氏」（くみのうこうぢ）「ち夏と幸助

「お菊と清十郎」あり。黒と光氏のあざく益。夏

か氣りまづひく由縁ほき事をうそと例の差根

詔故作り。女ふ見せざるがまの門子あり。とい破
捨んや。男の物か。守原木連筆。あて
きの僅のぬ徳と櫻すふ。ご教。ぬ紅消すれど
五古ふせんじく。連玉童ふかく。もひと
かくも。自下の菊と題。甘りの氣の異名を
あきらぐ
通草とよべ。序下老人の。語よそうてあり
不保已矣。方久。修業。接上よ。

柳亭種彦誌



此二十九第一回
りゆうがき画



金澤の酒問丸
加賀屋砂兵衛
娘於夏

加賀屋
手代辛助

か
ご
や
駕籠屋の
女房あ福



此處
アキラ

二の巻

第四回の

まよふ

りよびき

画

處女
アキラ



糴 吳服屋

勘七

鎌倉米町の

女房
衣

米問屋但馬屋清十郎



附言

やつこ
予の小方といふ中本を経て文化丙寅の夏まで三十四年ま
ちやまうぬ馬ぐがあきやふあくう今あとふ老ふらもそ我
あくろのまづびるれべ時ぬやんちをざれとすまづこの草紙
みゆの文字あえあれべ私をううあんのあづきとれむじらふえづひの
くわれども罪をしき悪人すゝ縫母縫子の中むらまくだりひせふ、
せのあればまくまくの人の妻ふむをうけ者もほく眞珠殿義
かとも言ひむとあむのいづりあて先あんと思ひ
よもじん姓ぬかて病人のとくふふり全恨ふうつまくもどすあづ
坐城ざく怪徴のとくづひりよ一時十郎が一死ふ不貶をまくらひ
やあべくざる事ふが、それふ倍て後ふ利を得たり夫婦ど
より両家さうもむげうりふ様がのふ年ふふくられと
是例の我がりうみてあまび紀を

縁結月 下 菊巻の上

柳亭種彦著

一 駕籠で送姫名

昔へ花の鎌倉とその蟹島もあかくあらざり揃門高き
武家商家當地ふ居錦の轡車へ隣園まで景近く便
よき地の金澤ふもあく豪君をまうけむが此所も頗
る妻の都そひ出端の田舎道は漫を向ふしけば方へ
町ふりりなづれねるかと草舎がちとまく吏る板を根も

祇肩向左を簾右を却たゞ風呂の着板そ
まふ周靡めく物を腕本よかけへ籠むきえ
かごせんききはせあへ來かる娘あり京都でひ十
その妹もひを何うまいりもふ口傳紫銅の蝶の猪
摸招第の古風ふと見比かぢまろ崩しやの家のかづき
駿へ目ざるえ縉二筋角びものあ色は重せがからひど
赤い枝ふ仰て出を白の象牙ふつけるね替ひうと蹴りをかじ
裏衣禽羊履かろげあり是へ當所の本術をぢか賀

か兵衛が一人娘その名を夏裏とよびきて家をもつてからも
まことに中の中の事のむきえを頼捕頭の見様と准
候してゆきまと往來の人も見えぬ猪ふ連へも代り
ま助千三郎の男さう慶次げざくごうち
ぞろひの公道でもち下女と丁兜と四人連手助へもち
そまう「お夏さまお寺へまわるとあらまほゞそれへ
道がちひまど「ゑへ先づみやうがあつて「へいおがのめよども
め」まきう「ヲヤおがえの見事にあへお福の「あんおおしお母
ぞんの象でござりまつた「そりへとお夏へきてから。

か客があよよトハひよごとまつてそもアうんわふ
やへん長松をつれておまかせが向のむかでね葉とおま
を摘でまなちあうどそはるが向よまれ繩常がさみて
あるよトハまほら獨へきかくせんが さがつぞくへ今日ハ
まやまんとあがめへ おがあくとさきは階ふきみが
まろひ一それ幸助さんまううりあくへあげまうへ
あるがまアが一つひよまほまお二階へあるうもせき
があづきを助さんとへも今ふらぐまアはも葉

ああへりのつてうてあげとちくわうとちあへもぐらまくらまく
ともちのまくらまくらまくらまくらまくらまくらまくらまく
ハイお茶を「いやざのえがま赤ぞ。とのこくべんもどかく
ぢぐくじがアレ天井がまくまよアひく」ぢくとぢくらせふ
ちうとく通ふくびれと「さやうあくちとがくとがくと
ゑあがきくまくらめく時代がまくまくとまくと真ぐと余程
おうちがひくとまも「それこそえみぢやうじうじうじうじ
あくまもあくまもふ鯛魚があんぞとひまちあわく「ま

もまたとあつあやうもまとも。あふんぬゆども福びんぐ
トホ「何事あやアおあけとお徳ときほのうど。それまくら
朝氣ぎよ「ヤシキモと。さきまやからひろん善光はありて
え松と名を改めだひのイヤモとぞ利酒まであらうのそれ。
今もかみとまへおまきてお夏こまふれをほりて絆がり。
ひまでもねくめんがやア。あくぢやアのらひやうのきびの
こと「ヨリ・あやアそんまとぢやアねく自地がほけりご
きんのむらうさんのおうびで見せをせよとからうて居よう

いと且承そゆのあとももて「まうまくあらもやうまくとみの私
うちづれとあまく供奉ふをと二十を越えざるまざと女房とも
わちませぬへあきらかにあてびじびうよまと「ざくらじふちくらぬぐ
草み子の口傳ふ。こま
りせそふあるひと私がちふるままととひくととまの朝見が
めのいやらしさ。それふややアキアビテうせす。トちるのとまのうをうそ
へゆき
一先月そんままをもうまやうまつ。今月もやつだう「さう
じとふえておがんもつた。「イ とあがく まやテ私が身を退

まほく 「ちよび身をひいてとてあるよつてのを
トキルがんかうんがんせうじとくもあかへふけれど
をやぶらうとかうんがんせうじとくもあかへふけれど
がまうもあらうんわやア トキル まぐれかくじをまくはれよ。され。
とくはる ちよび身をひいてのをやぶらう
あらう ちよび身をひいてのをやぶらう トキル トキル 「だいじとまくは
じよび身をひいてのをやぶらう トキル トキル 「だいじとまくは
まくはるを
危険をもあらうげなれがんがんせうじとくもあらうげなれがん
あらうげなれがんがんせうじとくもあらうげなれがん
へ

「思ひ仇とあつて入ゆるのまへはあまづら トアラカニヤウタカラマ
かあくどみふりもあわせへ さへあへるとかくへばざへく

ちご死あづて来るのを見ればたりのをあん えだうきよじさる
かうそま蟹節おふ泡みをひきわげて人ヒトがまう人ヒト真マサニ一乳

のよそひか顔タキをあまきぬひまく。よひまがじびくとまきトマシの
あをアモ「あふよひすがじまくとあまく」うきをかめんドトマシされ

まもろじま岸アマカニふちくられまきアモ「かんふうく」うきをかめんドトマシされ

ようそく「うきへいと」「うきへそれへあをアモでゆくとアモア

かあさりがさんあうどいたん「ちやくはうづのきくも助
ごんもらすまうとくもじびひません一晩年のまか年をよはせまの
押絃の羽子板をくわうがねておれふりく其時の幸賜ごくが
きやくもくうごくいきごとのぞのてえるとかまくさまが。ゆめもく
紫着うとかくあゑるとき助ごんが。やあまくふ似くからまき
うらひのまくごくうまもとくもとくものねふねでちくわと
まひ。幸助ごんちがえがあらうの。そくとあやく見ねさまよ便
あるから冠十もひのまくか年もおりきあるまく船へりの

きうるをりへとそれから日をつけてあまとイヤあゆ
車だしけ親馬鹿おもたかとくらうのとあるとさふね
がのあい星きぼ取とくて今いまうそお氣きがほわと見えそはるも
よそへもうもやもんちらがとみおも夏なつもりのまどもふ
ぞのやうなみやアとまくとめのぞくうあの年とね
あるとまくとがもうて男おとこの傍そばへあわくゆゑがふ供とも
そきかく断きりよ君きみとくひまがうやうもうま助まほと狂きうつて
まくらまくらと。私わたくしは接せつ接せつふこまうへや。あんまうごから

お夏さまよへ見え方をやめうとせうげてわざれど私があき

をあきえぞうともあきえぞうと向ひふると遙くとぞう

かげをあかくさするを助さんへるをのびやか福ぞと

りりこだすりうそが、さうとあはくをとしまくへりと

人ふもひれぞゑをりんぞあくさき。さつきかひくねむると

まごふ摘まみそく。をゆうそ二物へがあがりぬまへぬま。

うさみと眼付て幸助さんを後からあげ私へえうづの

巫女のうちの出干へそらと廻り歸れてきておもへ。ザヤ

おさんさんのあきがさると ちよとまろとあづくもの ふふ荒はうをま
あらそもすう裏の井戸 諸人あつてはまきみまち
あるふか巻をもみて虫のゐねくまよてま
極へははのど。多く。まやまや トヌ。えぢ
をあげてわらひをとぐよ備て今見へあくろ様の呂命日
ごくせ着へあくろぬか。序統儀ふ體か ニア幸助さんと
お堂をあふれて侍女堵あそび トひそれでまふ「それでも
えぞく多くおまうのこゑくふまきもる顔を未く

まきうそものふるまうらをぬくわへり
あがてましませう称。それ。ま助とてひじきる「ハイ和子
ゑをちうと例れいのき下戸と一戸のミ。うんとか考かぶ。まきとづ
りき。ゆき。ヨリ。マセ。ぬ。も。福。そ。と。ざ。や。う。き。を。『尾
か。か。を。あ。』 や。ま。ま。と。一。昨。三。日。ざ。え。る。様。が。私。を。よ。び。ふ
は。き。も。き。れ。ま。と。ま。ん。あ。の。ふ。か。つ。と。わ。ら。ま。み。め。わ。ん。と。よ
あれ。が。跡。そ。う。の。す。ご。今。吉。す。れ。と。役。害。も。あ。い。更
お。余。も。り。と。來。ゆ。う。が。手。一。身。か。も。あ。れ。ま。し。と。向。箇。妻

かづのうちくはとるが功者ふらうあやのちうかのそ渦底の
息みごとりて一括かへりそれゑいそれとうんを助を引
あげゆうとありうてあらあれよかまく今まよ是やどお
あももも移へじぞえやあれが名代よゑ今ふからこまくさぎア
そあふれかづに粗放へもよとひとまくびのちやれ
をくさうどがそりやア若い力て有るもとそれえい三
耳ハ止くりびでももやくりてが夏さまえやア春
もぐそごくうまもみももくうると解のえむかがうそえ

事をいともよ後をまきあよ「そぞろじてまぞやまほじく

今やきわちよゑがくられてこまとれまく、やくじきうくまく

幸助さちのすけ、忠領ただのり、三男さんごがわるか承うけうけまつうとくふう今幸

助すけよばみ代しろせひくと親おやぢが不ふぬむとそれで、里さとお孫まご

ふイヤましのとまきのと親おやぢのりめぐあらうるおむき

今いまあれが直ただすかやく下くだのむのを助すけざかの親おやぢはまうづ

かうそあらうそれをまぐの我が意いよかれられりそむ

からくも車くるを御ごりまくとくそわるをせまろてまく

やどかす
されろぢれが宿へかな川の滝の橋を右へまでもとぢまき
さうごと身自承ふあま人の宿文をかねてさまで名前を
まことくじまくらうむせ助ぞん昨日あま人の内へりそとも
まちおおびさうちがくめとくざるうとちうくえはわく
まもと
注くみを合せて辞まぬぢうそめゆきを直取様よかを
あ／＼たしふ只今か／＼まあとくうぞどくうきをトモをもくわくと
まくまく／＼ちやくさうきかくさうりつそればりよ／＼ちのう
をまく
うちく苦勞もあまとくとどくう／＼さうきをまみゆ





どんひあらうさん候ごとくおもてまえへたまえんこアレ
あらんざうべ又がうそてある山ゆへひ直りいざれのまわく
あやアコモるぞ幸助さんもをほけぬねがりそ見てゐるとあの
姫さんとゆきをもどるよけりも褐一毅のふをひもつたかう
さうひととひくわうハイ且形様が艶筋とまえんをひれく
うらへとわけとちりあやうまへから薰つけまもとまれが
まどもそる者をよそりて今日のむほんじよそひのあへ
あらんふか今せんやもあげざんとぢりまづざをそ

アリヤモモトモルスギガハ夏様ガハシヒツコトサマシテモセラフ
「ミスナサのあぢべハモクアハシヒツコトサマシテモセラフ」
モクシテモクシテモジキモトモヒムキモタモヤシモ
シテモ。それモタニ代ヤヤシレカド「アホ見ハジメテヨミヒ
キアリヤモアモアゲテハシキアシカクヒツギリテアヒサモレ階」と
モクシテモクシテモジキモトモヒムキモタモヤシモ
シテモ。それモタニ代ヤヤシレカド「アホ見ハジメテヨミヒ
キアリヤモアモアゲテハシキアシカクヒツギリテアヒサモレ階」と
モクシテモクシテモジキモトモヒムキモタモヤシモ

あひらうませんわあれ。がつぢやアからておうつとく
かくらう。京にひまきされば、よからぬ。それも繕うま
トあきのうう。彼がでも巣をあへとおりづねたう
うど。おふあてかくるのが、えどじとべー。まぬがどん戸ひつま
ぐれぞあむうそれそみのねぶまみの罗えき。龜のみ
せうづらうあるちづくらうそらん。あヨ、そわ

三

脱理の中ト甘い

金澤のか樹木角か。まきとが作り破ちんさぬづく

鏡樽買へばぞくを數擇角擇へば般若陽徳お独

利の布袋さへもくとくとく君られぬせもくさか賀ひの

店の夕若方中の間ゆきみの袖兵房ふくへ登る樂

酒肴食の席もかこよせど散乱するのみ中ゆも筈盤

ちゆこぬ商へかくもよ帳のまくじさくう見え視第あ

りてざれこゑくもうらむちへト鶴口よりあそ

ゆくをまほき

舌へもすと写をすとられぬり獨どんあまうそこひ

アあうへいゆくもまくみぐさくもうけまく長連山が

そぞろ人あはれ。あまうひ。コウち夏をもつて早たおくお夜食やちゆく
あげてうるさむひが。からめも着裳そぞうでもわびしかへれど
お務ごむをござふ。箸はしもおとせまわせね。まわせまわせまわせ
よしよトキモル。細通ほそどおり「もじりもびくわれままわせまわせまわせ」
ざんざんざ。長尾ながおざのまくらまくらも真まことにぬが
お内うちざとみづみづみづみづふきのう。幕まくらの送おくり。ちこぎま
かくる時とき。おどり。遙とほ。目めがこるから。うづうづ。せきまくら

せぐどへイ 旦那様ねへあひとまを「きわめてう。コウそとよ
ゆるみア 今、ちびり。お夏の夜まで精進ごとくれども
ほりて喰せりがつからアセツをうりとかまへゆくもの
えさあまうございも福もの詠みア あいざ「これへお夏さる
のち摘きの野菜。これハ我が加奈川のおお産龜のみ
せんべりとござりまると一ウ摘みてゐるがとまへこのり。
えんぢろかくらう「うふおおまくもどざくまくね
此所茅の人ア 田甫の墨色をりえぞといもうちや

けれど而してゐ所アリ。あるとてゐまきア已（そろは）が方の耕地（うぶち）をひきア
あれよるよア度（あつ）の其上（そのう）不穏（ふくわん）ぢづくふまへ摘（つま）して皆アニ度（あつ）
がち止（ゆき）てお夏（なつ）さゑあきざア何（なん）ごうべく涅（ねり）つけヌ（ヌ）を
みやア何（なん）がをういり大（おお）あうへがちあげてあもとえ（ト）いふ猶然（ゆうぜん）
「そりやアいきのああへ早（あや）くもの源義兼（げんぎけん）をおくつり
うそあへをざうてあきる「るんで而てまよ悲（かな）」とさきこつて
私も云せんりゆと云ふと思ひとヤレお筆（ふみ）をこそむ
精氣（せいき）ア游（あ）人の「わうひうひあどひふ。マレ。すくと」と

りく窓のをうき。且那様こまうりかひでござりまきとねまきとねまうぞ八
人義^{ヨシ}の控助よろんとひよもひよもが夏カが今日の供フタよろんよろんがとう
びざりまきと撰アシガトらうアシガトアレ又墓所マツコでも何ナニりそ笑ハスまくるをうき
まう。まうとひよだ。あれアレ今カらてこの席シテで見ミるミあつうちアツウチど
ほホ
あ猿アマアマ「それへうんアム」アムとぞざりトゾザリまうとあるアリある様ヨウづらヅラのちこと
ひよのを實ヒツてゐヒツがまガマとありアリあやいさまアヤイサマとす。隣ヨリ妻フミの巫女ミコ
えびきエビキて口キをあくせみアクセミてこみコミがめうメウさんサンのあくアクもやる

そがの身を私へ悲へゆゑ「もうちれどほく」それから私がお
毒ふでもうむちやア止ひと止せやまつともうべくみゆ
豆をこえべとあきえぐ生口をああまとと向のなむと橋まと
とあひづ。こくと。と居眠固ひ色ゆりの事をあべまと
ね幸助さんへ息杖を纏でかしげとよせまきと日ふべ里十里
での道を歩行てかせぐ物を纏目の耻をえせる事あると
は幣を振て大股あらわもぎれてやうとお笑ひがゆのをやであん
ぐめてトひまざせば「愚痴ぐぢ」愚痴ぐぢの事ごとが爲め

よりがあれそりも先頃感ひ。まゝそれよ。お福えりを加筆
みやげ
川の出産といつてゐる。そんまりうつされゆる。「ものうちあらぞ
佐
さうござ善うあら「きうごどびうすまきと「ウそれで安堵じ
やくいん
従とひて二何ともやうしませざれり「ちりどぐるかじ
めざあれひまうア「ごくうひく月日の下で生れひらうと
きやうとま帰り兵龜のあのやうふあらがむぞうと
セんべい
チヤ董餅をちさんざんがりふらうとくまうご源業とくの
せんべい
あまおうざられてのたつてぎ「えがあれども煎餅をま

もああへりへせんぐの数のみのかみざわぢやアあれま
せん佑一をうへゆつご參せん鑑げん氣きがうれくやうどもあまん
まよとくとぎま先さき刻とき支助じすけがちうととびをききそそれえうまえ
ねやがあれも飯めしがでもうらうちうとらとらとよとぞうんうん
一幸助まやき助まきうさんさんゲ「ハイあまいぞ居用ごよみ佐さ」
よろこびうござむ福龜ふくきの子この命めいへ助すけうこうこうてきとうまえん
波集よあひとらまきふ鶴つるの内うち舟ふねを投なげてかかせせくくすすと
よめのうへきをうこまうみみ。ときふき助まもうとえる

がりくへば、さうも軽ふいよがのむちくふちの家とゆゑど
若それとも親がお母かぢやアとお福をやうて期をほしきを
そぞろがあらちふぞんドよくまきをうござるやありや
そへつまひる「さうへまうてはやうふが役ふもくもまきる
者をあれのヤミやうも「あれふやも福。ま助へ涙をとらげて
あひきもぞざかう已きがよそんざも幸運ぢやアあさまひうあ
ちうすす内うち證の親子のえあごさアこれでうれい夏あつぞ
わらふがり、さふらうがりうのう見ふく上みゆきのうど其便

えと春る「ヘイ 脱ぐとさうもせうが前ふまゆて糞糞の

佐

「アさう。その間徳利をそれへ使ひごそちうの。それへぞき

ま

「文晁マガツ」とぞうさまとがこれへちうと「あれもさう鳥も福も

きざりりこ

あかの、あ幸助マサヒロ」もものあねアネ「が利通マサニ」へ下戸シタトでもちがくなか

た
昌

た
昌

あま

あま

あま

あま

私ヨミ

私ヨミの所ヨミでもとつあらひをまかずマカズだすタスそれでまよマヨ「簪

も原せねヨリとらひけタラヒケ」のうまんのうまやウマヤわ人

けやアひま助ヨミをどくドク、ぢやアヨミうみを賣ヨミ「簪ヨミ」

とひたすらせんとお供のかいびくのじよもが跡續へれ

きま

佐

ご極る、お夏もつて口が

トキハシテ
びつり

「お夏様を」あさひすり

娘のひきごとく算を

トキハシテ
ひこ

「お夏様を」あさひすり

でもちもふ跡をそぞせまと必家又業もつて今昔もんべもよぎ

トキハシテ
ひま

「お夏様を」あさひすり

巫女寄跡ふ當るとゆめうづ俗あり」ごとく人あへ跡」と正月

トキハシテ
ひま

「お夏様を」あさひすり

のちもむだらうへしづか福が備あへ獨てりそ難をとまきとま

トキハシテ
ひま

「お夏様を」あさひすり

まくわあれへまわど不思議みかどもへ

トキハシテ
ひま

「お夏様を」あさひすり

椎の伯母」とぞんく、生くもひどきる、傳種の、多くもろう

トキハシテ
ひま

「お夏様を」あさひすり

成名まともちんまやうが一つも篤へるゝ力辭まく事。ござ居成名
され
已もこもれず行つて歸つて、すまほ過去帳をあけて見て
え
ひきこせんぞ
びりうりともの時、先に相様も何れが母も夏とある。ど
ぞうけ
自へあくる風あでぬよ。いふ外へ服ひりをさせられも今あ
そ
のうちも、うとくれぐももうまくやうと、が己が内をよこす
かれも
他の事の違ちあが、もくゆくと、とおの内を
そ
そろうが、とお夏のやうが、とぞて相様が、うららかと、と、
は
松のやうみのをとくと、わづひのじもそれと年もよ

あの不男^{ふを}がきのひやふやうられたるのう今度の西へちと已^かをまく

とぎて初^{はじ}うけ車^{くるま}をとすとひもとお猪^{いのし}がだれても夏^{なつ}が

力をかうとあさぎりもようからくとあさぎりもよぎ

も福^{ふく}も喰^くトのを「それともあらへ縁組^{えんぐみ}といひの店^{てん}」

あんづのさんへかまちやくとそのうでお取程^{そくじょう}をえまくと

ふサヒれをあまきぞうと否^いうとひのう。幸助^{こうすけ}の名^なまへ

ゆうそあらはりはるはる金秀^{きんしゅう}の米町^{こめまち}で仕^{つか}ひとひそ向^{むか}高^{たか}たか

代^{しろ}通^つ名^なされへ又^{また}己^{おの}がやうふ所^{ところ}の地^じ面^{めん}を後生^ご

まも る
トふ守つて居るるをこそんえのびくとくの冥人アメノシよられハ
ト前マサニも後アフニ前マサニも北面ヒガマツを賣マツルうと以マサニへがまカマす所
でも刻コトブがよされむ買マツルそあくアカル琵琶ヒバ鶴クレを官カミまマサニまで見ミ要ヨウ
とひよ所マサニかわカワと但タシ馬マサニの地面ジマツを親カミ船ボウへ何ナニ被ハサウある款クン
アソモの息アソモの清十郎キントロ今年イニニ十五ジシとひよトハシ男オトコがひご
女メイ郎ロウへわざハサウる金カネがあるのハサウ内シタ證シテでもやれこれとひよトハシおぎ
かカ十七八セトトチから僅ヨリの百ヒ小コ三ミ弟ヂあだアダりも向アシけアシケこまうコマウごその位スヒ
ひよトハシおさるハサウ身シ帝テイでよヨとも法國ハフクニがまハサウとまづ劫ハサウめメとえトエ

近^{きえ}年^ねもやぢが先^へて後^{あと}家^{いえ}もちかくとあへ^{ゆき}うは十郎^{じゅうろう}
ひけ

うんぢやうへ^{ゆき}せうとばくらうびかへと相^{あう}候^{うそ}へまうのうふ

まご内^{うち}へもひのぎ^むのび^む見^むすをられぬ^まの前^{まへ}よ見^みるをれと

らのきうる^あを^あはへよ^あの^あは^あり^あ、^あを^あや^あと^あの^あが

さきの後^ご家^けのあん^ど。これかく^こ人^{じん}のあざへひかく^{ひかく}いき

ざがちあひくろ^まが^ま居^ゐとせう^うぢ^ぢ、^ぢ夏^{なつ}を見^むて^てと^とつ^つか^かせ

ひひくえ^{ひひくえ}と^とくの^の先^月やう^まか^かく^くお役^え寧^なと^とあ^あの^のひ

あるうど^{あるうど}、^{あるうど}これ^{これ}まよ^{まよ}よ^よか^か、^か是^はい^いの^の由^ゆ縁^縁が

あつて胤がそとゆるをうなづくとされば也見せどもか

ちがあやがちとお腹み印があらざりともちやくからだけ

きとつるをゆるとゆひうすとしそれをねが所へござりゆき

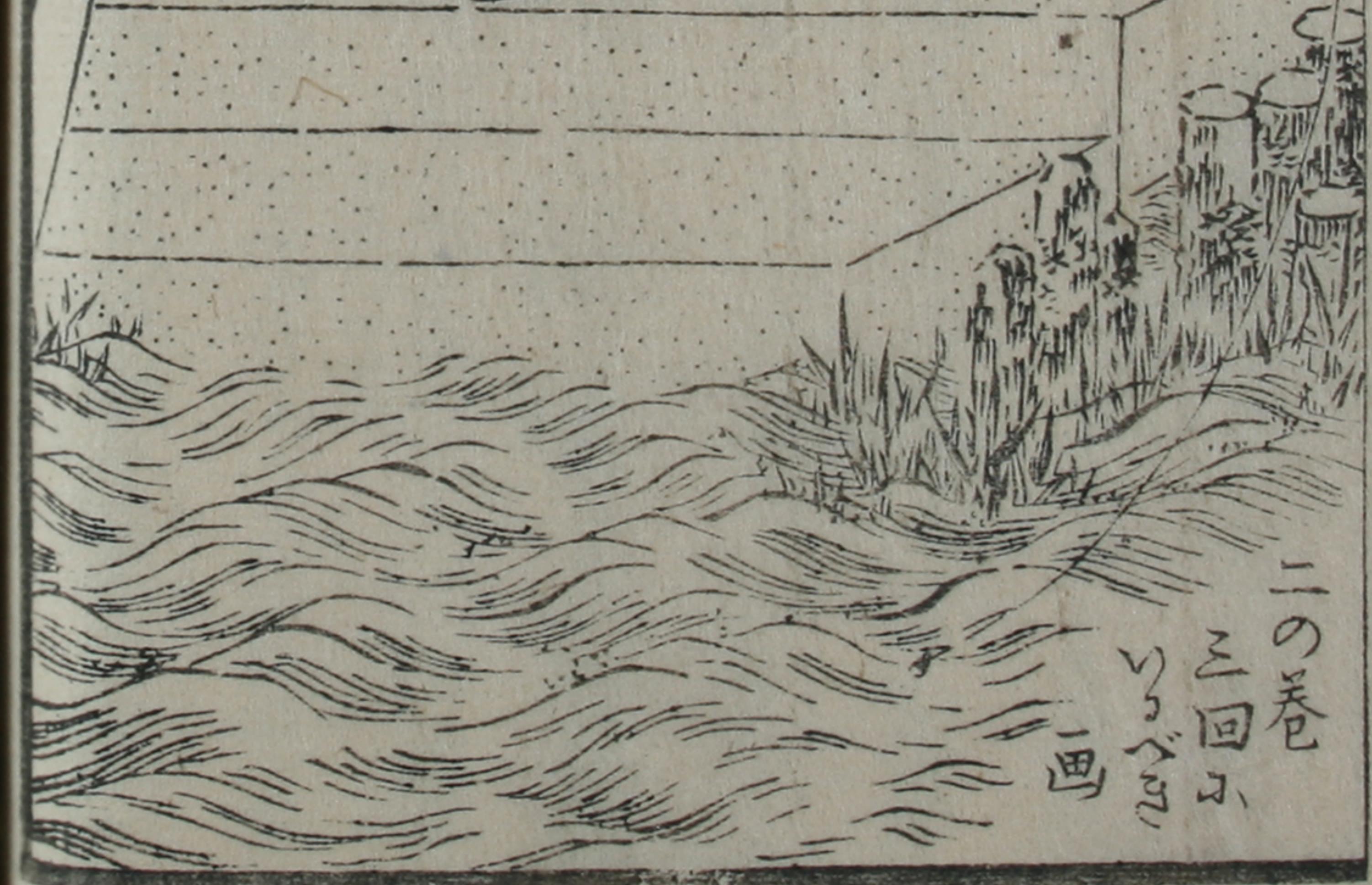
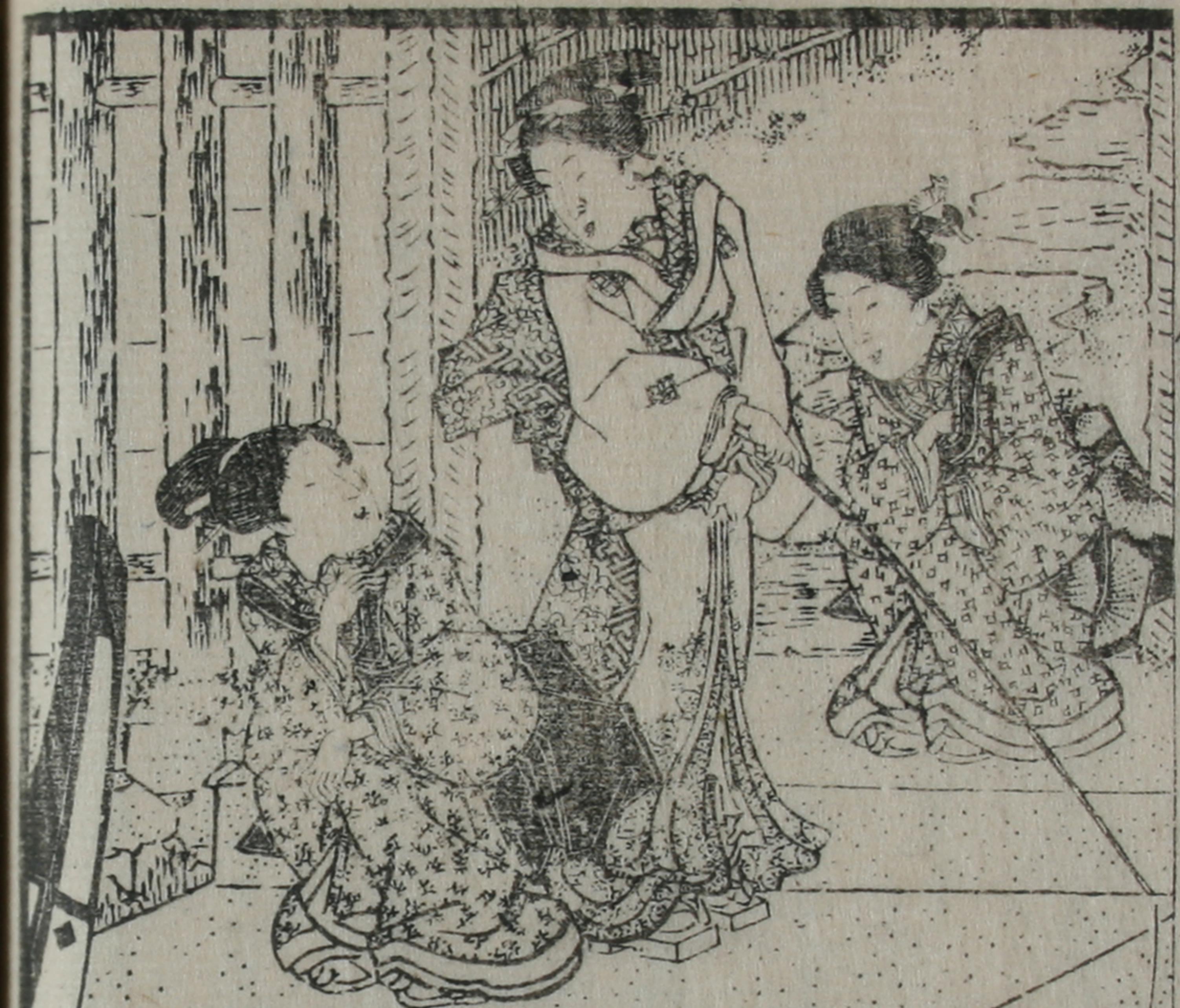
まゆとくもあひておほへてそれゆうじ猪と毛びらかえこと

らちうまやあやくやみ族役をもくもそもぬともあらひ

お夏ふもあざててうどうするまへてものあらぬ者ふひひつて

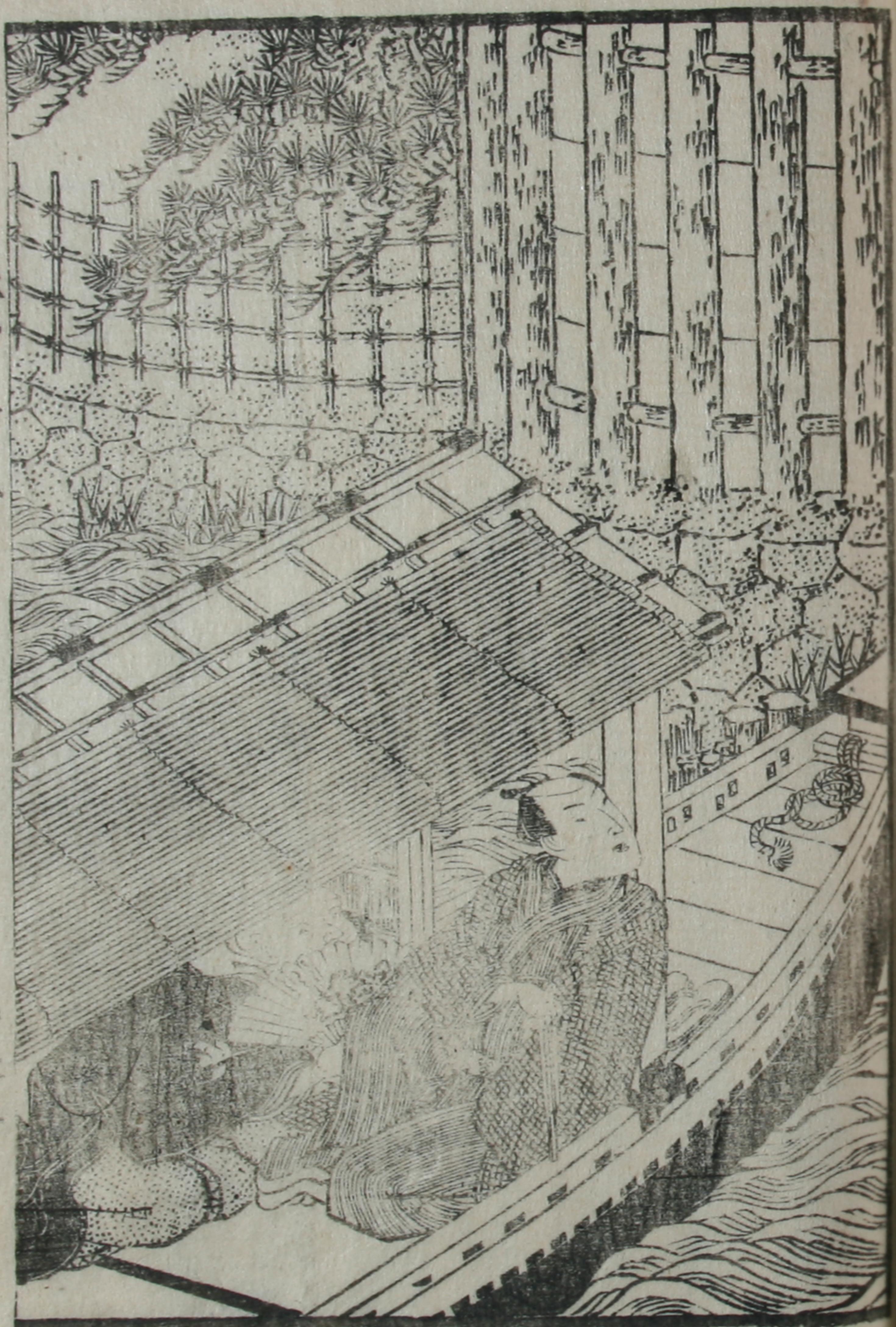
その娘をうそふせうとげわんこまふやぢくと相入ゆるやたら

りうどもがの翁う等は翁からゆくもぐりは日傘ごときもそ



二の巻
三回目
りうべき

一画



君のふも太骨折あおがせこくて見えままか夏なつと實じつふ一對いつだいともひづが
さうともまうされませんとその男おとこがからでからであれが
前まへで一對いつだいといふともちやア真まよア余程よごいともひづね、
それどん物ものでござうまきとといふもんが筈はずのへあゆあゆのくさうが
ヨリと人並ひとなみの狼わをからであるより死死ゆしふままが内うちへからぬ
但ただしるをうひ引ひりて融通ゆうつうふもと波なみのままど是ぜ波なみ人ひとを
つけがれつけられと因いんて安堵あんとそれか直ただとおはづおはづ

極^{きわ}に^{まき}まく^さう^ごも^せむ^くす^まる^くも^よ次^うの^も代^かを^まて^逢
うと^うの^う時^{とき}綱^{つな}が^め目^めふからぬ^ゆせ^よ奥^{おく}の^おと^とを^とう
かまく^うりの^あの^うろ^して^て綱^{つな}を^とれ^うと^りか^かく^かゆ^ゆで^すう
和^わ方^{かた}の^先組^{ぐみ}が^あと^か加^く算^{さん}の^者萬^{まん}利^り盈^{えい}と^やま^まを^を定^じ綱^{つな}も
督^{くわ}役^{えき}も^まま^まり^まと^とり^とく^くも^代が^かば^ばじ^そそれ^は
ちや深^{ふか}の^ほ縁^{えん}で^でど^どぐ^ぐう^うき^きせ^せう^うと^とき^き繩^{つな}へ^へま^まあ^あれ^れ
か^か繩^{つな}と^とあれ^れも^もと^とれ^れを^をら^らそ^そか^かか^かモ^モと^との^の綱^{つな}本^{もと}
きの^の序^{じょ}事^じと^とき^きの^の又^{また}家^{いえ}の^のち^ぢづ^づる

あごのを代^{カイ}町^ノを表^{アハラ}風^ヒとヤスと天道^{アメニ}ふゆえまよと^グ
まくらを^トか黒^{マツ}が^アの屋^ヤ板^{バン}を^{シテ}まき^{シテ}用^ヒひま^シと^{シテ}滑^ルれ^ガ
まくまく^{シテ}お夏^{サマ}と^{シテ}も柔^{マサ}と^{シテ}転^{ハシル}で^{シテ}まき^{シテ}れ^モ
それへぞかり^{シテ}あそ^シと^{シテ}まき^{シテ}の対^{ツバ}のあく^{シテ}一^ヒの^{シテ}重^{タメ}五^カ
重^{タメ}八^カまく^{シテ}け^{シテ}び^{シテ}ま^シま^シと^{シテ}ま^シの染^シあ^シ急^シふも^シぬ^シま^シま^シが
席^{シテ}の儀^{イニ}負^{カシム}か^シせ^{マシ}と^{シテ}余^ヨ程^ド日^ヒ間^{マツ}も^シか^シつ^シま^シと^{シテ}う^シ只^シ
今^{シテ}のうち^{シテ}京都^{カイ}へ^{シテ}ま^シと^{シテ}ま^シく^{シテ}女^{レバ}の儀^{イニ}で^{シテ}じ^{シテ}う^シま^シと^{シテ}う^シ
代^{カイ}料^リま^シ増^{マシ}と^{シテ}金^{カネ}が^{シテ}あ^シふ^シり^シま^シせ^{マシ}ど^シ多^シの^シ方^{カタ}も^シあ^シひ^シま^シ

まよひからまきて足下へまよひのうとすややうひりでねども
かくやのう
多々迷惑ひまつてふらりまきてかまう事もあびる
からかづけおきまよひとイヤお琴も對ふうせまをもきり
まきとまへる。こゑの様もへう山田流まく方のも房内流の
琴と胡弓をやしゆまよ邊傾まで移父様の奥ふ勧て居られ
まよひ遠くもどは連彈をうかひまどもごまうませうと
ま代のりのりひよどひまき兩教ふどもまくまくにがまほのえ
せりぬまくまく
世の考へ精答をへまくめへ幸助をやも不思ひあるまよひ。

一あをせ
まもら、
お夏のみを仕合ご道楽をとあまうて二者へ何ふひても
ヨリテうがひちれど又スの夷構ふよえどち夫やちう家
わわいふ年中拂仰ふ來くわら一坪ぢうりの申をききて
ゆく目ぞ。但馬尼の寮を見てびづく。お夏うど
かう。お夏あれよよち福ちびく。うそ顔をもあげぬされ
ヨシの娘で見や射の後おづらうちどもてまよきうらのちども
あんみのをらうべと是非をときぬをつゝマナツラだ
それふまアあのをく。じろくの傍注文をあつまわうと

くじらむかきふるけれどあんあごも又もうあひがるく
こゑへ音助もあトドキうふ狂儀もいとぞふう波むのと。お福
あせきりもちやづり止ざ。^{たんざ。}^{きそめう}針めうどらぞあらうてへ
ぢくわうけそれ今もせとされても十えあをうへ
かうけそあらうかづまうべどももつてくわくのそろくへ
くさアヌまたテヘリぢくわく女もえうせはげそゆうわくへ
髪結のあとのがわくもく氣があるようまでくわくあらちかく稍
あらうれど上までもみがからるときびのくろいわくへ

何を言ても音信不通され秦とうかと云ふてゆく後又顔
をも得わぬが夏が独り沖の石親こそ知る所あり也振の
見えもせんうと入りハ冷汗せうく少一息ゆくも夜へも夏の
傍へす「どうもおどごきりあまうけも是が由リ猪納の事」と
ひすりてもある「のう景助さん」さやうと智はももうあこる
方の防劫当が後どあら白へおもひつねるをど是もかへ何ぞ
りけがちうて急の工事でんじうとあるやあうちあへも夏
くる又ぞうりありまきうトさざあともる玉座を詫ひせびとへまうど

やうへ
あぐさめどじ顔見合せそは身と見るつた
まゆまゆド うふ
かわくら称名さるのに附ふやあん鐘の音もがくと
きこ
ゆえう



